

2013年9月12日・週刊きたかみでは

川村慶子全詩集

弘前在住の91歳現役詩人

「川村慶子全詩集」。

日本詩人クラブ・日本現代詩人会・「日本未来派」「瑠璃」所属、青森県弘前市在住の91歳の現役詩人。これまで刊行したオリジナル詩集（11冊）から281篇、詩誌やアンソロジー等の発表で、従来の詩集に未発表の詩71篇を時系列に収録。加えて詩集の序文や跋文、あとがきや、詩以外に、既刊著書から、俳句、エッセイ、小説、評伝を収録した。

1922（大正11）年、北海道日高生まれ。十代後半、代用教員などの仕事に就いたが、戦時中22歳の時、過労で「不治の病」（粟粒結核）発症。その後、夜間高校、大学と進み、通学・通院をしながら33歳で高校の教職に就いた。

第1詩集は1960年。以後、65年、73年、78年、82年、91年、95年、98年、2002年には第9、10を12年第11詩集と続いて発行した。

58歳で蘭繁之氏と初めての結婚。1920年生まれの蘭氏も、多くの詩集を発刊し、童謡詩人としても知られる。「雪の音」（作詞）は西脇久夫作曲で、NHK「みんなのうた」で全国放送。豆本の造本作家としても著名。

旭川の詩人、小熊秀雄に憧憬の念を持った川村氏。身体的、精神的な苦悩と悲しみによって相似的な面を抱かせたとも見られるが内なる表現が叙情性ととも訴えかけ、共感を醸成する。

コールサック社の編集者・佐相憲一氏は「解説」で「歴史に取材した描写力と豊かな滋味、人間抒情の余韻などを評価するだろう」と近年の作品を語る。一方、50歳代までの北海道時代の作品は「女性が自立してさっそうと働いていった戦後社会の先駆者として（略）病弱ゆえに身体的悲しみを抱え、屈折した内面を朗らかな日常に必死に励まし、どんな時も詩文学を心の友として、ひたむきに胸のうちをつづっていた頃の様子は、今回の全詩集で初めて目にする人がほとんどであろう」とかつての氏の内面的な生の凝視を洞察。いわば愛別離苦の最果てからの「逆転劇」とも記し「ひたむきに人間そのものをとらえている」。

A5判559ページ。定価（本体5000円＋税）。発行・コールサック社（TEL 03 - 5944 - 3258）。一般書店で扱っている。

と紹介されています。